

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 22 回 第 7.1 節～第 7.2.3.1 節

2018 年 11 月 15 日

小 田 勝

今回から「第 7 章」に入る。「7.1 法助動詞」については、特に補筆はない。

「7.2 証拠性」の 177 頁の◆について。すべての終止形接続の助動詞は、ラ変の語には連体形に接続するのだが、最終行に挙例したように、上代の「なり」はラ変の語にも終止形に接続する。仁科明（2007）はこれを「終止形分出の徹底」と呼んで、「なり」特有の性格に注意している（これは、仁科も指摘するように、上代の「終止形+みゆ」（185 頁）と同様の現象であろう。「妻立てりみゆ」記歌謡 108）。終止形接続の「なり」は、中古以後は、ラ変の語に対しても連体形に接続すると考えられる（186 頁用例(13)などを参照。「あなり」のように撥音便形に接続することが非常に多いので、何形接続か不分明なところもあるが、ラ変の終止形に接続した例のみえない「べし」の「あべし」の形を考慮すれば、「あなり」の「あん」も連体形の撥音便形と捉えた方が整合性が保たれるだろう）。類例をもう 1 つあげておく。

・櫛いちひに酔ひて、皆臥してありなり [不之天阿利奈利]。（正倉院仮名文書・甲）

178 頁「7.2.1.1 べし」。次のような「べし」は様相的推定の延長にあつて、相手からそのように見られるに違いないの意を表す。

・[浮舟へノ] 思ひに籠もりゐて、[匂宮ノ病気見舞イニ] 参らざらむも、ひがみたるべし (=拗ネテイルト見ラレルニ違イナイ) と [薫ハ] 思して（源・蜻蛉）

・君のかうまめやかにのたまふに、聞き入れざらむもひがひがしかるべし。（源・末摘花）

179 頁「7.2.1.3 「べし」の否定」では、和歌中の「べからず」の例をあげておく。

・ふたい山山並み見れば百代ももよにも変はるべからず大宮どころ（夫木和歌抄）

181 頁「7.2.1.4 「まじ」の接続の違例」にあげた、未然形に接続する「まじ」について、次例は形容詞の例である（本文上の誤りがあるかもしれないが）。

・あはれ都の人とともに見て行かましかば、知らぬ道ももの憂からまじと思ひ出でて（坂翁大神宮参詣記）

「7.2.1.5 べらなり」の182頁、用例(7)について、誤写でなければ、『都路の別れ』に次のような例があるので、念のため、あげておく。

・竹植ゑわたして、ことなることなけれど、あるべしく住みなしたる所なり。

182頁「7.2.2 証拠に基づく推定」。「らし」は「ぬ」は承けるが、「つ」や「き」は承げないと書いたが、次のような例があった（安法法師は10世紀の人）。

・来や来やと下に待たる雁がねは訪れうらし今ぞ鳴くなる（安法法師集）

同頁の◆にあげた「けらし」について。「けらし」は、院政期以降になると「けり」を和らげた表現としても用いられた。

・武庫が崎浦よりをちに漕ぎ行けば来し方ははや霞みけらしな（歌合162 広田合）

「7.2.3.1 終止形接続の助動詞「なり」」の186頁、用例(11)～(13)は相手の話からの伝聞の例であるが、次例は、平兼盛の古歌「我が宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひのほかは君が来ませる」（拾遺15）による伝聞表現である。

・なほ頼め梅の立ち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり（更級）

次例の「なり」は、「どうやら風邪を引いたようだ」のような、実現した事態に対する話者の判断に基づく推定（現代語の「ようだ」に相当する）を表している。

・「なほ苦しうこそなりまさるなれ」とて、ただせきあげにせきあげさせ給ふ御けしきにて（讃岐典侍日記）

次のような例は、婉曲の用法である。

・宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ（＝意ノママニナラヌ）世なれば（源・総角）

新刊の『読解のための古典文法教室』、101頁の用例(22)の括弧内の訳、「思イツメナイヨウニ」は、「思イツメナサラナイヨウニ」の誤記であったので、ここに訂正する。

[出典追加] 坂翁大神宮参詣記①坂十仏②1342年③富山房百科文庫／正倉院仮名文書②762年頃③小松茂美『かな』岩波新書／都路の別れ①飛鳥井雅有（1241-1301）②1275年③中世日記紀行文学全評釈集成3

[引用文献追加] 仁科明 2007 「終止なり」の上代と中古一体系変化と成員一『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房